

アリストテレスの知者観

北
畠
知
量

はじめに

〔1〕知的存在者の序列

〔2〕知の歴史的発展

〔3〕魂の各部分の状態

結語

はじめに

古代ギリシャには、様々な知者がいた。^[1] 知を表わす言葉は十種類以上にも及んでおり、このことから彼らが知性に関して多面的な考えを抱いていたことが推察される。実際、知者とは一体どのような人物であるかということが古くから論議されていたのである。七賢人という言葉一つが、その事情を象徴していると言えよう。

知者と知に関する様々な考えをたくみに組みあわせ、知者とその知を歴史的・体系的に最もくわしく説明しようとしたのはアリストテレスである。アリストテレスの知者観の概要は、現存する著作によって知られるわけであるが、彼の著作全体は、W. Jaeger の研究、Aristoteles, *Grundlegung einer Geschichte seiner Entwicklung*, Berlin 1923. 以来、思想的発展という相の下で研究されてきているのが現状であり、それ故、彼の知者（知）観といえども、そのような相の下において研究されねばならないはずである。この要請は無視できないが、本小論ではとりあえず彼がどのような視点から知者の知に論及しようとしているかという点の的を絞って、アリストテレスの知者観を整理してみることにしたい。

〔1〕 知的存在者の序列

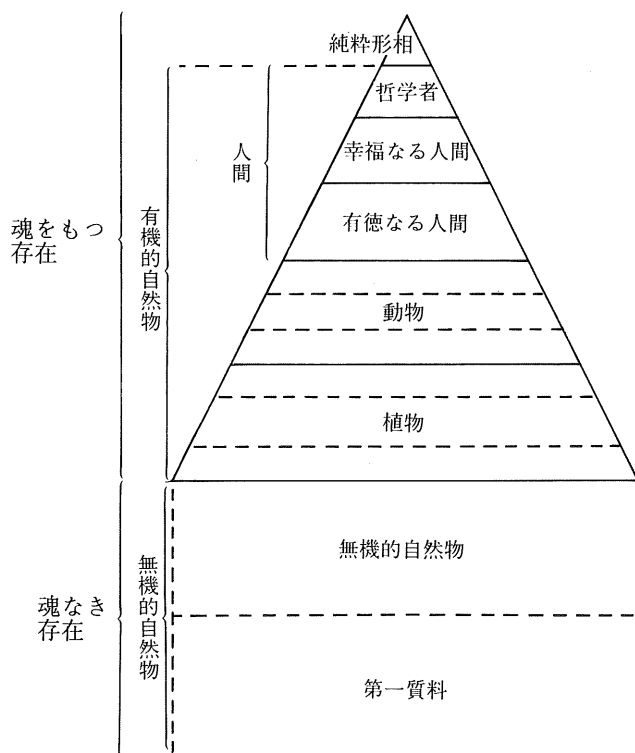
アリストテレスによると、一切の存在は宇宙的な規模で、より高次の形相へと目的論的に発展をとげているわけであるが、その序列の中で、知者^{ソポス}（厳密には愛知者^{ピロソス}）とは、一定レベル以上の所に位置する存在であるとされている。これが知者（知）に関するアリストテレスの第一の視点である。

アリストテレスによると、真の意味において存在するものは実体^{ワシヤ}、すなわち具体的個物である。この実体、すなわち存在そのものは、その存在の素材^{ヒュイア}である質料とその存在を存在たらしめている形相^{タイドス}との合成体であるとされている。存在は、静止的には以上のような二面を有している。

他方これを動的に見ると、一切の存在は、形相をもたない「第一質料」と、質料をもたない最高次の「純粹形相」との間にあって、より高次の存在へと目的論的に生成発展をとげつつあるものとしてあらわれるのである。従ってこの序列の中にある一切の存在は、可能態^{デユナミス}と現実態^{エネルギヤ}（完全現実態）という二面性を有することになる。アリストテレスのあげている例で言えば、「ヘルメスの像は、木材のうちに可能態としてある」と説明されるのである。このように見るとき、存在は、存在と非存在の矛盾体として発展しつつあるものとなる。

さて、このような存在の序列は、一つには物質と生物とを堺にして、二つには生物と人間とを堺にして大きく三つに分けられる。そして各々の分野において更に細かな序列が設けられるのである。この序列の中で、知者（愛知

者)は、人間の中では最高位に位置するものとされている。以上を大まかに図示すると、次のようになる。



魂は、生命原理としての下級の魂と、精神的な魂とに二分されており、後者が人間という身体の形相と見なされる。そしてこの精神的魂の出来ぐあいによって、人間は更に様々なタイプの人間に分類され序列化されるのである。その序列の中でも最高位の者（愛知者）に数えられる人物として、アリストテレスは、タレスに始まる（更に言えば、ヘシオドスに始まる）哲学者達を念頭においており、この点が第二の視点へとつながっていく。

〔2〕 知の歴史的発展

知者とその知に論及する場合、アリストテレスは知の歴史的発展という視点を設定している。この視点は文明史的なレベルで設定されていると同時に、哲学史の分野に狭く絞りこむ形で設定されている。

アリストテレスは『形而上学』の中で知者の知とは何かという問題に言及し、知者（知恵ある者）^{ソフィス}に関して「我々のいだいている種々の見解」として六点をあげている。それらの要点を次に示そう。

- (1) すべての物事を認識する者、それ故結局、普遍的なものを最高度に認識している者。
- (2) 人間には容易に知れないような物事を知る能のある者。
- (3) 正確に認識する者。
- (4) よりよく物事の原因を教えることのできる者。
- (5) 他の目的のためではなく、学のための学、認識のための認識を求める者の方が知者である。

(6) 他から命令され、他に服従するのではなく、他に命令する者の方が、より一層知者である。同様に、諸学のうちでは、各々の物事が何を目的としてなされるべきかを知る学が、これに従属する諸学よりも一層知的である。²これらの六点を満たして成立するところの「第一の原因や原理を研究する理論的な学」が知なのであり、それ故アリストテレスの認める厳密な意味での知者とは、このような知（学）に通じた者ということになる。

ところで、このような意味での知が成立するのは、知の歴史的な発展の最終段階においてであるとされている。

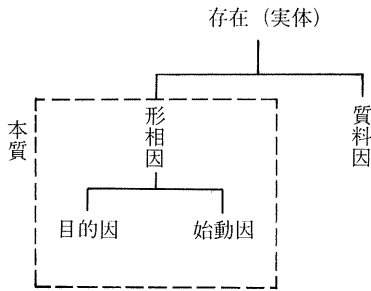
『形而上学』では知は(1)「常人共通の感覚」を超えて発明された技術、に始まり(2)実生活の必要を超えた娯楽に関する術から(3)認識^{エピステーマ}（諸学）へと発展し、更に(4)第一の原因（原理）を対象とする学（認識）に到ったとされているからである。³同様の見解は『断片』においても見い出せる。そこでは知は、(1)生活上必要な技術的な工夫に始まり(2)美や雅にまで進んだ諸々の技艺、(3)七賢人に見られるような都市的な諸徳、(4)自然の学問（*φυσική θεωρία*）へと発展し、最後に(5)「神的で宇宙秩序を越えた、全く変転せぬもの」に達したとされており、特にこの最後の知は「最もすぐれた知」と呼ばれているからである。⁴

このような知史の中で、特に原因（原理）を対象とする学（自然の学問）は、更にいくつかの発展段階に分けられることになる。そしてその諸段階において、かの有名な四原因——実体因、質料因、始動因、目的因——が探求されたと説明されるのである。

さて、ここまでくると、興味深い問題があらわれることになる、すなわち、知は四原因（原理）^{ソフィア}を探究する知であり、特にアリストテレスのそれは第一の原因（原理）を探究する知であつたわけであるが、これらの知が、まっ

たくその性質を異にするような諸原因（原理）に関わっているということを念頭において考えると、これらの知は、はたして同じ性質のものなのかあるいは相互にその性質を異にする知なのかという問題があらわれるのである。

アリストテレス自身も、この問題を認めた上で、『形而上学』においてその解決方向を示している。すなわち彼は知（第一哲学）とは「存在を存在として一般的に考察する学」であり、諸学（例えば数学的諸学）とは、「存在のある部分を抽出」し、これに関して「これに付帯する属性」を研究する知という視点を提示するのである。この点からすると知（第一哲学）の下位に、あの四原因を探究する知が位置するはずである。



※ 諸存在のうち、第一義的に存在するのは実体である。

※ 本質はただ実体のみ属する。一〇三一 a

※ 原因は、これをその説明方式から言えば本質であるが、この本質というのは、或る物事の場合には目的因である、……しかし他の或る物事の場合には始動因である。

一〇四〇 a 三〇

※ 真の実体は、質料を一定の存在状態にあらしめるところの原因すなわち形相である。

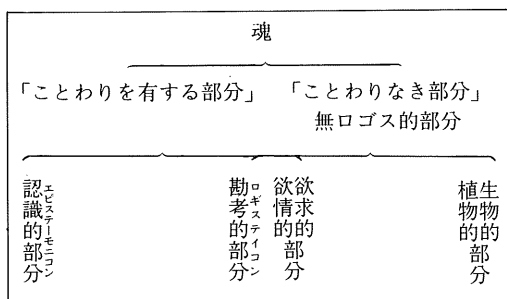
一〇四一 b 五一 一〇

更に四原因の知の相互関係が問題になる。アリストテレスは、一方ではこれらの四原因を区別しているが、他方では、これらを、質料と形相という視点から二分している。すなわち、質料因はあくまでも質料因として留まるの

に対して、これ以外の三原因は、多くの場合一つ（本質因）に帰着するものとするのである。この全体的な関係を
 図示すると前図のような構造になる。

諸々の存在を存在たらしめているのは、これらの諸原因である。従って、この体系は同時にこれらの諸原因に關
 する知の体系ということになる。

〔3〕 魂の各部分の状態



アリストテレスは、魂の各部分の状態ヘクシスという視点から、知者の知を説明しようとして
 いる。これが第三の視点となる。

アリストテレスによると、魂はいくつかの部分から成り立っている。魂は、まず大
 きく『分別ロゴスを有する部分』と『分別なき部分』とに二分される、更に前者は、純粹な
 真理認識を目的とする認識的部分と、実践的な真理認識を目的とする勘考的部分とに
 二分されている。⁶これを図示すると、ほぼ上図のようになる。

このような魂の部分部分には、各々の最善の状態がある。その状態が各々の部分の
 アレテーであり、これらが統合されて、魂のアレテーとなるのである。

この中で、「ことわりを有する部分」のはたらかしは、いずれも真理認識ということに

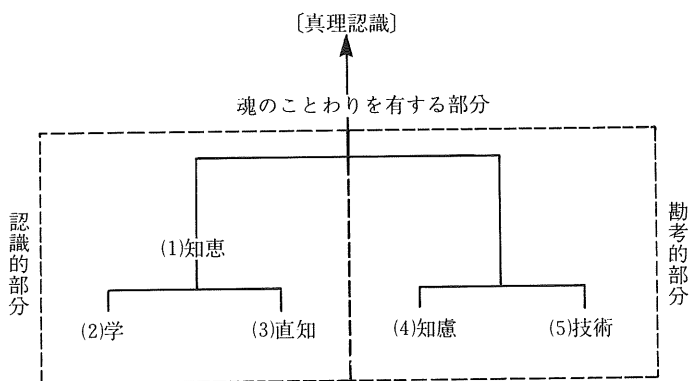
ある。それゆえこの部分の両者が、最もよくその「^{アレテウエイ}真を認識」している状態が、「ことわりを有する部分」のアレテールということになる。そのアレテールを説明するために、アリストテレスは五つの知の概念を提示する。

「われわれの魂が、それによって、肯定とか否定とかの仕方では真を認識するところのもの」として、われわれは、五つのものを挙げなくてはならぬ。すなわち、技術 *τέχνη* ・ 学 *ἐπιστήμη* ・ 知慮 *φρόνησις* ・ 知恵 *σοφία* ・ 直知 *νόσος* がそれである。思 ^{ヒュポレーフシス} 念 ^{ドナサ} とか臆見 ^{ヘクシス} を省くのは、こうしたものをもってしては偽に陥ることが可能だからである。

これら五つの概念は、魂の「ことわり」を有する個々の部分の状態を表わしており、次図のような関係をもつとされている。

さて、このような知の体系からすると、知者とは一体どのような人のことになるであろうか。

認識的部分の知のアレテールは知恵によって、勸学的部分のそれは知慮と技術によってあらわされているのであるから、これらのアレテールを有する人が厳密な意味での知者ということになる。そして事実アリストテレスは知者とは、「その技術の最も確実完璧な人々」をさす場合と「単に根源から導出されるところを知るところにとどまらず、根源それ自身に関してもまた、その真を認識している」人をさす場合とがあるとしている。更に知慮はそれ自身が一つのアレテールであり、「人間的な諸般の善に関しての、ことわりがあつてその真を失わない実践可能の状態」のこと



- ※ 知恵と知慮の関係は、健康と医術の関係に例えられている。一一四五a
- (5) 技術のアレテーとは「その真を失わないことわりを具えた制作可能の状態」のことである。一一四〇a 一〇
- (4) 知慮とはそれ自身が一つのアレテーであり、終極^{テロス}において、何をなすべきかを規定する。
- (3) 直知とは基本命題^{アルケイ}(定義)それ自体にかかわる。一一四一a 五
- (2) 学のアレテーとは「論証ができる」という状態のことである。一九三九b 三〇
- (1) 知恵とは直知^{ノビア}と学^{メテ}である。一〇四一a 一五一一〇

であるとし、知慮^{フロニモス}ある人を厳密な意味での知者の仲間数えている。

以上に述べた第三の視点は、次のようにまとめることができる。人間のアレテーとは魂のアレテーと同じことである。魂のアレテーとは、魂の各々の部分が最善の状態であることに他ならない。しかるに、魂の「ことわりを有する部分」は、真理認識を目的としているから、真理が認識されている場合、その部分は最善の状態にある。その状態とは、知性的アレテーが認められるという状態である。従って、そのような状態の魂を有している人が、厳密な意味での知者ということになる。

勿論、当時の人々は、もつと様々な種類の人々を知者の仲間数えていた。「もののわかる人」「思量^{エウロ}のすぐれた人」「才覚^{デイノス}ある人」等々がこれである。しかしアリストテレスによると、これらの人々は真理認識という点でいくつかの問題点を含んでいる。例えば「才覚^{デイノテリス}」とは、所与の目標に首尾よく到達しうる能力であるが、もしもその目標が悪しきものであれば、この才覚は「邪知^{バヌルギヤ}」となってしまうからである。⁽⁸⁾

これらの人々を除外し、更に、技術の完璧な人が慣例上知者と称されている場合を除外すると、アリストテレスが知者と認めているのは、結局、真を認識することのできる人、すなわち知者（第一哲学者）と知慮ある人に限られてくるのである。

結 語

以上、アリストテレスが知者とその知に論及する場合の三つの視点について概観してきた。これら三つの視点は、有機的に融合して一つの知者観をつくり出している。すなわちアリストテレスにとって知者とは——真理の観想が可能となるところまで文明史的に発展を上げてきた魂、その魂の中でも純粹に知的な部分をもつ魂を有している存在者なのである。

このような知者（知）観の根底にあるものを探っていくと、「類似のものは類似のものによって知られる」という定式がうかがいあがってくる。⁽⁹⁾というのは、ここでアリストテレスは、知の歴史的発展（文明史的・哲学史的発展）という横軸と、魂をもつ存在の知の序列という縦軸とが織りなしている平面の、ある特定の部分に知を位置づけると同時に、そのようなスケールを縮小する形で魂全体のある特定の部分（特に知の部分^{ソフィア}）に知を位置づけようとしているからである。これを簡素化すれば、文明史の中における魂と、魂の中における知とが類似の関係をなしているということになる。

このような発想はプラトンにおいても見い出される。ただプラトンの場合は、『国家』⁽¹⁰⁾に示されているように、アイデアの観想を終えた哲学者は、順番がくると国の政治にたずさわらなければならなかった。けれどもアリストテレスが想定している知者（第一哲学者）には、そのような義務はない。アリストテレスの知者は、先の発想に従っ

て、宇宙の真理をただひたすらに観想する。そのような知的生活こそが最大の幸福であるとアリストテレスは考えていたのである。

〔注〕

(1) 知者と呼ばれる人のタイプは実に様々である。

何でもないような平凡な人が、デルポイの神によって、突然「知者」だとされることがある。七賢人の一人である農夫のミュソンやソクラテスはまさにこのような人物である。

「七賢人」と呼ばれる人々は、政治的手腕や先見の明、あるいは、はっとするような寸言を発したことなどで、知者だとされることが多いが、その内実ははっきりしない。

タレスに始まる Vorsokratiker を、人々が知者だと呼んだことはよく知られている。彼らは日食を予言したり、季節風をしずめたり、自分の前世を語ったり、宇宙の誕生を説明したりした。勿論彼らは、決して自然現象だけを研究したのではなく、それ以外の様々な分野に通じるとともに、実に個性的な生き方をした人々であった。彼らは一方では知者と呼ばれ尊敬されたが、他方では、役立たぬ事柄に腐心する者として軽んじられることもあった。

ソフィストと呼ばれた人々は、文字通り、知のよく働く人（知の働きをよくしてくれる人）であった。彼らが示した知とは、ヒippiアスの場合のように、諸事万端の知ということもあったが、多くはプロタゴラスに代表されるような、弁論の術に関する知であった。

有名なソクラテスは、神託のつげるところによって最高の知者とされたが、これを彼自身は、無知を知る者（知者）と解釈した。その解釈に到達するまでの間、彼は世間的に知者と称された三種類の人々——すなわち、政治家、作家（詩人）、手工者——を訪ねたと告白している。

- (2) Met. 982a6-19
- (3) Met. 981b10-982a1
- (4) Frag. 13 (Rose)
- (5) Met. 995b5-10. 996a20-30
- (6) Nic 1139a1-30
- (7) Nic 1139b
- (8) Nic 1144a20-30
- (9) De Anima 404b
- (10) Politeia. 540B